

静岡県教育委員会

会議録

平成 24 年度 第 7 回定例
7 月 9 日（月）

静岡県教育委員会委員長 金子容子は、

平成 24 年 7 月 9 日に教育委員会第 7 回定例会を招集した。

- | | | | | |
|---|-----------|---------------------|---------------|-----------|
| 1 | 開催日時 | 平成 24 年 7 月 9 日 (月) | 開会 | 13 時 |
| | | | 閉会 | 14 時 20 分 |
| 2 | 会 場 | 教育委員会議室 | | |
| 3 | 出席者 | 委 員 長 | 金 子 容 子 | |
| | | 委員長職務代理者 | 高 橋 尚 子 | |
| | | 委 員 | 加 藤 文 夫 | |
| | | 委 員 | 溝 口 紀 子 | |
| | | 委 員 | 齊 藤 行 雄 | |
| | | 委 員 (教育長) | 安 倍 徹 | |
| | 事務局 (説明員) | 寺 田 好 弥 | 教育次長 | |
| | | 杉 本 寿 久 | 事務局参事兼教育総務課長 | |
| | | 田 中 潤 | 事務局参事兼学校教育課長 | |
| | | 鈴木 啓 之 | 事務局参事兼学校人事課長 | |
| | | 吉 澤 勝 治 | 教育政策課長 | |
| | | 奈良間 一 博 | 情報化推進室長 | |
| | | 石 川 理 恵 子 | 人権教育推進室長 | |
| | | 原 田 揚 一 | 財務課長 | |
| | | 西 川 誠 | 福利課長 | |
| | | 輿 水 まゆみ | 小中学校教育室長 | |
| | | 岩 城 明 | 高校教育室長 | |
| | | 渡 邊 浩 喜 | 特別支援教育室長 | |
| | | 塩 崎 克 幸 | 高校再編整備室長 | |
| | | 活 洲 みな子 | 社会教育課長 | |
| | | 柳 田 恭 一 | 文化財保護課長 | |
| | | 松 田 好 道 | スポーツ振興課長 | |
| | | 中 村 孝 | 静岡教育事務所長 | |
| | | 橋 本 勝 | 静岡西教育事務所長 | |
| | | 谷 野 純 夫 | 中央図書館長 | |
| | | 三ッ谷 三 善 | 総合教育センター所長 | |
| | | 渡 邊 聡 | 学校人事課人事監 | |
| | | 平 川 猛 | スポーツ振興課主席指導主事 | |

4 その他

(1) 第 17 号・第 18 号議案は、原案どおり可決された。

(2) 報告事項 1～6 は、了承された。

【開 会】

委 員 長： ただ今より、教育委員会定例会を開催する。
今回の会議録の署名は、加藤委員、溝口委員にお願いする。

【非公開の決議】

委 員 長： 議案の審議に入る前に、本定例会の議案の取扱について諮る。
第 18 号議案は人事案件であるため、非公開としたいと思うが、異議はないか。
全 委 員： 異議なし。
委 員 長： それでは、第 18 号議案を非公開とする。

【会議の非公開】

委 員 長： ここで会議を非公開とする。

<非>第 18 号議案 静岡県スポーツ推進審議会委員の委嘱

第 17 号議案 平成 25 年度静岡県立高等学校学科改善

委 員 長： 議案書 1 頁「第 17 号議案 平成 25 年度静岡県立高等学校学科改善」
について、塩崎高校再編整備室長より説明願う。

高校再編整備室長： <議案についての説明>

委 員 長： 質疑等はあるか。

溝 口 委 員： 普通科と総合学科の違いは何か。

高校再編整備室長： 総合学科は普通科や専門学科とは別のタイプの学科である。入学した時は全員共通の学習をする。「産業社会と人間」という科目の中で自分は将来どのような方向に進みたいのか、キャリア教育を行う。そして、2 年生になる時に自分の専門を決めていく。専門に応じて、例えば、駿河総合の系列で説明すれば、「人文社会」であるとか「自然科学」であるとか、いわゆる普通高校におかれているような文系、理系の系列になる。これ以外に「情報」、「デザイン」、「ビジネス」、「会計」、これらの系列は商業に近い系列である。それから、「生活文化」は、家庭や福祉の科目を学ぶ系列である。「ものづくり総合」は工業に関する科目を学ぶ系列になる。よく言われているが、総合学科は、中学から高校に進学する時点で自分の将来を完全に決めている子どもたちばかりではなく、その子たちの将来をキャリア教育を進めていく中で、自分の進む方向を定めさせて高校入学後に自分たちに必要な分野の教育をさせるという趣旨で作られている。したがって、一年次は共通、二年次以降に自分の進みたい進路に応じた系列で自分の専門を学んでいくようになっている。

齊 藤 委 員： 私も総合学科にわかりにくさを感じている。将来、自分がどういう職業に就きたいかを探し出す上で、色々な科目を選択できるということか。例えば、普通科の場合は必修科目があるが、そうではなくて、総合学科では自分で教科を選べるということか。

高校再編整備室長： はい。そういうことである。

斉藤委員： そういうのを称して「総合学科」と呼ぶのか。

高校再編整備室長： はい。

斉藤委員： そうすると、それはわかったが、それでは沼津商業や島田商業の「総合ビジネス科」も同じような意味で「総合」なのか。

高校再編整備室長： 総合という言葉があちらこちらで使われているので誤解を招いているのだと思うが、沼津商業の「総合ビジネス科」はあくまで商業学科である。これらの専門学科は必ず自分の専門に属する専門科目を 25 単位以上習得しなくてはならない。実際には 30 単位以上、勉強をする。ですから「総合ビジネス科」はあくまで商業科になるので入学した後に簿記や会計や経済ビジネスであるとか商業の専門科目を 25 単位以上、学ばなければならない。これまで「国際ビジネス科」は、国際に特化した学科であったが、「総合ビジネス科」では会計なのか、あるいは別の分野なのか、商業の中で選択科目が 2 年次以降ある程度分かれていて、科目を選択できるようになっている。

溝口委員： 「総合ビジネス科」とただの「商業科」との違いは何か。

高校再編整備室長： 商業教育からビジネス教育へという学習指導要領の中の流れがあった時があって、どちらかというところ商業教育は理念的、理論的なものである。一方、ビジネス教育というところより実務的な科目という傾向がある。現実には学習指導要領に定められている科目が 20 科目と決まっているので、科目を学校独自で作らない限りは、その科目の中の選択になっているので、「商業科」と「総合ビジネス科」には際立った違いはない。

斉藤委員： 「総合」という言葉がある時代を反映する流行語のように用いられて「総合科」ができた経緯がある。大学でも「総合政策学部」とか、「総合」という名前を冠した新学部構想がたくさん生まれた時期があった。そういう意味で「総合」という言葉があちらこちらで出てきて、わかりにくさにつながっている可能性がある。これはこれで結構だが、今後のネーミングは考えなければいけない部分があると思う。

高校再編整備室長： 中学生やあるいはその子たちが卒業して後に受け入れる企業や一般社会からわかりやすい名前は大事である。名前を見て、教育内容もある程度推察されるネーミングも必要であると感じている。商業高校も商業理論からビジネスのより実務的なものへという流れの中で商業科をビジネス科へ変えていったところもあるが、その専門科目の中での色々なものが子どもたちが主体的に選べる、全員簿記ばかりをやるのではなくて、簿記、情報処理、あるいは経済、そういったものを選べるようにということで商業科から総合ビジネスに変えていった学校がいくつかある訳だが、一方で今までどおりの商業科でいくということで、静岡商業や、浜松商業は商業科のまま残っている。名前が統一されていない部分があったり、総合という部分がわかりにくくしていたりすることはある。今後の学科改善の中では、中学生あるいは企業等からわかりやすいネーミング作りを心がけていく必要があると感じている。

委員長： やはり、前時代に「国際」という言葉が流行り、「国際ビジネス科」とか、大学でも流行った。学生があまり集まらないところもあり、全部ではないが、ある意味失敗に終わったところもある。沼津商業高校の資料には、「国際ビジネス科においては、国際理解教育（コミュニケーションコース）を特色としているが、生徒や保護者に認知されず、会計や経営にかかわる学習内容を重視する要望が強い」とある。本人たちからは商業科目、会計に特化してくれという要望が現実には強い訳だ。これは非常に良くわかる。一方、若者の海外志向は極端に減少している。また、一方では小学校の国際教育義務化がある。小学校5、6年で導入されたはいいが、どうやって高校の教育につなげていって、英語を活用した国際感覚を持った人材を育てていくのか。小学校で目論んだ人材が育っていくのか課題として見えてこない。幼稚園や小学校では英語学習に保護者も熱心だが、中学校に行くとも英語が嫌いな生徒が増えて、高校に行くとも更に増えて、どのようにリンクしていくのか見えてこない。また折があったら検討をお願いしたい。

高校再編整備室長： 今回、「国際」を名前から消した理由は、決して「国際」が不要だからではなく、特に商業ビジネスの世界では国際化は当たり前になってきていて、それに特化した学科である必要はないという考えに基づいている。新しい学習指導要領の中では、それまで「国際ビジネス」という名前の科目が「国際」が外れて、「ビジネス経済」とか「ビジネス経済応用」という名前になってきている。もはや国際化は商業の中では当たり前になってきていると考えられていて、「国際」という冠を外す中で国際は当たり前で全員共通の内容として学ぶ一方、会計とか情報とかマーケティングとか、色々なものを幅広く学ばせていきたいという意図がある。御指摘があったように全体を眺めた時に商業の国際科以外に普通系の国際科もあって、一部生徒がなかなか集まりにくい状況とかもあり、英語の学習というイメージに直結しているところもあって、これらの国際科というものを重要であることは間違いないのでどのようにわかりやすく伝えていくのが課題である。

加藤委員： 高校の役割は何であって、大学の役割は何であるかということ整理していかないといけない。今までは、いきなり専門教育に入っていた大学でも今の子どもたちは本来高校で学んでおくべき、リベラルアーツが不足しているので大学一年生、あるいは二年生の半分ぐらいまでは、リベラルアーツの部分をもう一度再教育し、それから専門に移っていこうという動きがある。そうすると高校とは何であるのか。高校は約半分の人が大学に行き、約半分の人が高校を卒業して働く、ビジネスに特化したものとか、工業だとかは、就職を志望している人たちを対象としている学科なのか、そうすると、そうではなくて大学に行く人に対してどういう形で高校のときに基礎教育を学ばせるのか、そこがはっきりしていないと大学も中途半端だし、高校も中途半端だということになってしまわないかなと心配がある。国際科という名前を付

けても国際人は生まれません。総合と付けたのは 20 年ぐらい前で、総合商社とか、総合建築会社ゼネコンとか、総合電気会社とか、総合がついているのが実業界でも流行りました。実業界というのは、逆に専門に特化していく形に変わってきているのに教育界だけ総合というのはどうか。世の中全体の流れの中で教育がどうあるべきか、見えなくてあるところがある。国際人を作るのならどういう段階でどういう国際人を作るのかというのがなければ、高校の役割は何なのか、大学の役割は何なのか、その前の義務教育の役割は何なのか、よく見えない。例えば、駿河総合高校の自然科学系列はカリキュラムを見ると、どちらかというところこれまでの理数科に近い。数Ⅲまでやるので、この人たちは大学の工学部とか理学部とか医学部を目指すのかなと思う。今までの普通科とか理数科とどう関係があるのか。わかりにくい。

高校再編整備室長： 高校入試の段階から色々な選択肢を用意するという事で普通科があり、あるいは専門学科があり、普通科なのか専門学科なのか、まだはっきりしていない子どもたちのために総合学科がある。総合学科については入学一年次が全員共通である。二年から自分の進路を考えて理系の進路に進む生徒のために自然科学系列がある。同様に文系に進みたい生徒のために人文社会系列がある。こちらは理科や数学の単位数が少なくなっていて、一方で地歴や国語の科目が多くなっている。それ以外に工業の方向に興味を持っている生徒のために工業の科目が学べるような系列もおかれている。入学してから選択できる。専門学科との違いは、工業とか商業とかの系列を選んだとしても 25 単位以上の専門科目を履修しなければならないという制約は設けられていない。あくまで自分の意思で自由に選択をできる。ただ、全く自由になってしまうと卒業後の将来に対して果たして十分な教育ができていくのかということになる。そこで、一応の目安としてこのような系列をおき、系列に即して専門科目が学べるということである。系列は学科ではないのでこの系列は学科に属していることとは違うイメージになる。普通科、専門学科、農業や工業や商業や、あるいは理数科、国際科、そしてもう一つの選択肢として総合学科が作られたという経緯がある。

加藤委員： 学校の中で何でもかんでもそろえるからそうなる。普通科に行った人が途中で就職したくなったからといって学校を変えて工業高校に移れるような仕組みを作っておけば一つの学校の中でちまちまと理系に行く人、文系に行く人、それから辞めて商店に勤める人だとか、あるいは町工場に勤める人だとか、一つの学校の中で四つも作る必要はないような気がする。かえって効率が悪くて中途半端な教育になってしまう。昔のように工業高校の中で電気科だとか、機械科だとかを設けたほうがもっと専門的に教育を受けられる。

教育政策課長： 20 年ぐらい前には農工商の専門高校と普通科しかなかった。その頃は、不本意入学で専門高校に行く生徒たちがいて、その子たちが高校を辞めてしまい、中退率が全国的に上がってしまった。工業高校が良いと

思って進学したのだが、専門的な科目をたくさんやらなければならないので嫌になってしまい中退する生徒が増えた。学科間の中でも科目が違うので専門性が高くなるほど学科間での移動ができなかった。そこで、文科省として作ったのが総合学科であり、すこし緩やかにいくつかの専門性を持った科目を子供達が選択できるようにして、高校に入学してから専門性を決めていくようにした。したがって、加藤委員が指摘したように緩やかになっている分だけ中途半端になる危険性はある。そこで、デメリットを緩和しようとしたのが系列である。ビジネス系列であったり、自然科学系列であったりする。高校に入学して少し化学の勉強をして大学に行きたいと思ったら自然科学系列に入って、自然系専門の勉強をしながら基礎力を付けて、それが到達できれば大学に行こうとなってきた。本県の場合はそれぞれの学区に総合学科をちりばめながら、そこにいる子供たちには少なくとも総合学科を選択できるようにしようとした。専門高校も東中西にそれぞれおいてあるし、総合学科も東中西にそれぞれおいて、その地域の中で子供達が選択できるようにしようという狙いがある。ただし、加藤委員が言うようにデメリットもある。その部分は学科改善をしながら工夫しないとルーズになると感じている。

加藤委員： 学校を超えて移動できるようになれば、一つの学校の中で文系から理系、農業、商業、工業と全部持つ必要はない。学校間の移動が非常に難しい、入試制度だとか転校が難しいということがあるから、こんなものを作ったのだろうけど、こんなものを作ると逆に専門性がぼやけてしまってどの学科に行っても中途半端な教育しか受けられないことになってしまう。制度と学校の作り方はもう少し工夫した方が良かったかもしれない。県の段階ではなく、文科省の段階かもしれないが。

溝口委員： 島田商業高校のパンフレットだが、いまの時点では案ですよ。

高校再編整備室長： はい。

溝口委員： 案の段階であるが、あまりにも他校と比較して見栄えが良すぎる。完成されているが、校正できるか。というのは、学科改善のイメージのところで、誤解を招く矢印が1本ある。それは、学科改善資料の2頁と同じ形になるのだと思うが、経理ビジネス科と国際ビジネス科が統合して総合ビジネス科ができるのですよね。これは情報ビジネス科も含めた総合ビジネス科ではなくて、情報ビジネス科は継続だと理解しているのだが、矢印の方向を見ると情報ビジネス科も総合ビジネス科に含まれるように見えてしまう。

高校再編整備室長： 斜めの矢印は今まで情報ビジネス科にいた生徒の中で全員がプログラミングとかより高度な情報の学習を全員が一斉にしていた訳ではなくて、より実務的な、例えばワードとかエクセルとかのようなりテラシーの教育を受ける子供たちとプログラミングに特化して将来プログラマーというかSEのような方向に進む子供たちと同じ情報ビジネス科の中にも選択科目によって二系統になる。これから新しくなる学科改善後の情報ビジネス科はSEの育成というか、より高度なプログラミングの技術

を持った生徒の育成を行い、従来のリテラシーの部分については、総合ビジネス科の中で、この総合ビジネス科の中は情報とか会計とかマーケティングとか、それぞれの分野について全員学ばせることを示している。リテラシー分野については総合ビジネス科において担っていくという意味での矢印になっている。

溝口委員： それならば統合とか、下に書いた方が良い。今の説明を聞いてわかったが、説明を聞かないとわかりにくい。

高校再編整備室長： 学校には丁寧に説明するように指示を出したい。

委員長： 情報ビジネス科の生徒は就職するのか。

高校再編整備室長： 就職する子もいるし進学する子もいる。

委員長： 教養科目は行うのか。専門に特化するとベースがなくなる。情報ビジネス科は一年次から専門に特化した勉強をしていくので基礎力は大丈夫なのか。

高校再編整備室長： 普通科目のボリュームは総合ビジネス科も情報ビジネス科もそう大きくは変わらない。例えば、30単位の専門単位を卒業までに学ぶとすると情報ビジネス科の生徒はその専門科目の多くが情報に関する科目で、総合ビジネス科の生徒は情報に関することだけではなくて、簿記をやったり、会計をやったり、マーケティングをやったり、商業の幅広い分野の専門科目を勉強しており、いわゆる基礎力としての普通科目についてはどちらの学科もほぼ同じように学習している。

教育長： このパンフレットの帯を見ていただくと、いわゆる一般教養と言われている国語とか、世界史、数学もグリーンとブルーの帯の中では同じようにやっていると思う。

委員長： それはよくわかったが、それでも転科することは不可能なのか。専門科目が言われているより多くない訳ですよ。基礎科目が多いならば転科は可能なのではないか。

高校再編整備室長： 不可能ではない。制度的には可能である。実際に多くはないが、工業高校の中で転科する生徒もいる。情報ビジネス科の場合は、一年次にプログラミングを行ったり、情報処理を行ったりした生徒たちが、二年次に総合ビジネス科に転科した場合に簿記等の単位数が全く違うので特別に放課後の手当てをしていかなければならない。

委員長： 一年次に学習していないと二年次につながらないという論理はどの学問でも同じである。経理にしても簿記・会計にしても同じである。

高校再編整備室長： 分野を広く学んでいるか、情報に関する部分を非常に厚く、系統的に学んでいるかという違いはある。

斉藤委員： 駿河総合高校の学校案内の中に学年制ではなくて単位制であるということに一言も触れられていない。

高校再編整備室長： 学校に修正を依頼する。所定の単位を三年間で取得すれば卒業できる。単位制の特色として学年ごとの区分がないので二年と三年が同じ科目を学ぶことが可能になっている。

高橋委員： すごく詳しく説明していただきわかったことがたくさんあった。保護

者の立場として子供が進路先として複数の高校で迷った時にオープンキャンパスに行ってその学校の先生と話をした場合は自分の学校のことなので詳細がわかっていてしっかり説明してくださると思うが、中学校の先生では納得できる情報がいただけるか不安である。市町教育委員会を含めて、高等学校にいる先生が自分の学校のことを詳しく説明できるのは当たり前であるが、中学校の進路指導に関わる先生方もこれだけ多岐に渡って色々な選択肢がある場合には選ぶ子供たちや親に対してきちんとした説明、ここはこうだからこうなんですという説明がそこでできるともっといいのかなと思う。わざわざ高校に行って説明を聞いてみようという子供がどれだけいるかわからないが、中学校の段階で詳しい説明ができればある程度絞ることもできるし、わかりやすく納得できる形でできると思うので、そのあたりも指導していただけるとありがたい。

高校再編整備室長： そのとおりである。中学生が進路を決めていくためには、中学の先生方に正しく説明をしていただく必要があり、これは学校の方も承知をしていて学校で中学生や保護者を対象に開く説明会だけではなくて、学校から中学校に出向いて三年部の先生方に説明する機会であるとか、あるいは、中学の先生向けのQ A集、あるいは、生徒や保護者向けのQ A集を作っていこうと学校が用意している。特に駿河総合高校については、今まであった学校ではなく、新しくできる学校なので情報が必ずしも十分に伝わっていないということがある。本日、定例会で承認をいただき、リーフレットが配布されるようになれば中学の先生方が知らないということもあり得るので、全ての中学校を回ることは難しいかもしれないが、特にたくさんの生徒をこれまで静岡南高校や静岡市立商業に送っていた中学校をまずは最初に説明していくことを学校は考えている。

委員長： 高校から大学に入学してきてものになる学生は基礎力がある。これを高校でつけてくれないと生活面においても非常に大変である。基礎力がないと生活習慣もないように思う。国語や数学などベースになる基礎力をやらなかった生徒は多少専門科目ができて入学してきて、ものにならない。基礎力は我慢強さとか集中力とか暗記力とかである。これを中学や高校でつけてほしい。これがあると大学でも伸びるし就職もできる。文章を書く力、読み取る力、集中して先生のいうことを聞く力は国語、算数、理科、社会で継続してやっていくことが大切。高校でお願いしたい。

加藤委員： 中学を卒業してどこの高校を選ぶのか、以前だったら中学卒業までの到達度に合わせて高校をきめていたが、最近は学校の名前が変わってきて目くらましにあっていて。どの高校に行くと、有名大学入学に有利なのか、就職に有利なのか、何に有利なのかよくわからない。せっかく専門高校という形で色々なものを用意しておきながら、あいも変わらず、成績の良い生徒は静高だとか浜北だとかに行く。専門などは高校に入ってから大学に行く時に考えればいいのではないかと、あるいは

は大学に入って、教養をやってからその先で考えればいいのではないかというのが普通であって、せっかく専門高校で色々なものを用意していても訳が分からないのであって、新設の高校はそういうところに行けなかった子供が行くのだというふうに位置づけられてしまう。意図とは違う歩み方をしてしまうのではないかという気がする。だから、どのような人たちに来て欲しいのかを明確にパンフレット上に示さないと選びようがない。新しい高校はどういう特徴があってどういう子供に来て欲しいのか、ある程度明確に示してあげないと何でもありますよ、だけど何にもないですよというような形になってしまう。

教 育 長： 少なくとも先程教育政策課長が言ったように、かつては普通科に行けないという消極的な選択の中で専門科にということがあって中退率も多かった。中学三年で必ずしも自分の進路を見極められない子供たちが総合学科に行って考えながら自分の進路を決めるという意味では総合学科は専門をそれほど十分に追求できないというマイナスはあるものの、子供にとっては先延ばしというかモラトリアムの中では存在意義があるのかなと思う。各学校が全てにおいてオールマイティーではないので、うちの学校の売りとか、うちの学校でできるものは何で、できないものは何かということを明確に保護者や中学生に示しておくことが必要だと思う。

委 員 長： 総合学科で進路を模索した経験をした学生は全部ではないが大学に来てもしっかり模索で答えがみつからない事例をたくさん見ている。

教 育 長： それは総合学科出身の生徒にそのような傾向が強いということか。

委 員 長： はい。高校で模索してわからず、間口の広い大学に入り、そこでも自分のやりたいことがみつからないという事例は非常に多く報告されている。全部が全部そうではないが。

加 藤 委 員： 自由とはものすごく難しい。子供たちに自由を与えるより、ある一定のところまで不自由を与えて、そんなものをやりたくないよという強い嫌悪感を持って、別の方向に歩ませるほうがむしろ良いかもしれない。嫌悪感も与えず、好きになることも与えず、なんとなく自由に選びなさいよという何かわけのわからない形でするずるといってしまうのかなという気もする。

加 藤 委 員： これは何年か経ったらどうだったのかということを中心に総括してみないといけない。こういう意図で始めたが、二、三年やってみたら意図とは全然違った形で子供が集まって学校が運営されているのであれば、では何が間違ったのかももう一度考えないといけない。たぶん色々な可能性があるけれどもやってみないといいとも悪いとも言えない状況である。

高校再編整備室長： 昨年度末までに単位制の定時制であるとか、あるいは、中高一貫教育校であるとか、総合学科であるとか、生徒、保護者、学校の教員にアンケートをとっている。同様のアンケートは、何年か前にもとっていて経年変化というか、様子の違いを比較分析していきたいという意図でア

ンケートをとっている。これについては、また、分析をしていって、果たして総合学科が当初の目的どおり進んできているのかどうか、他の中高一貫であるとか、そういう学校の校種についても、当初の目的どおり、あるいは、ある程度の転換も必要になってくる。そういったところについても分析と評価を進めていきたい。

- 委員 長： その他、質疑等はあるか。
委員 員： （特になし）
委員 長： 本案を原案どおり可決することに異議はないか。
委員 員： （異議なし）
委員 長： 第 17 号議案を原案どおり可決する。

報告事項 1 定期監査結果

- 委員 長： 報告事項 1 頁「報告事項 1 定期監査結果」について、杉本教育総務課長より説明願う。
教育総務課長： <報告事項についての説明>
委員 長： 質疑等はあるか。
委員 員： （特になし）
委員 長： 報告事項 1 を了承した。

報告事項 2 市立高等学校における学科設置等の認可

- 委員 長： 報告事項 3 頁「報告事項 2 市立高等学校における学科設置等の認可」について、塩崎高校再編整備室長より説明願う。
高校再編整備室長： <報告事項についての説明>
委員 長： 質疑等はあるか。
委員 員： （特になし）
委員 長： 報告事項 2 を了承した。

報告事項 3 大人の読書推進 大切な人に贈る 1 冊～県民メッセージコンテスト開催～

- 委員 長： 報告事項 4 頁「報告事項 3 大人の読書推進 大切な人に贈る 1 冊～県民メッセージコンテスト開催～」について、活洲社会教育課長より説明願う。
社会教育課長： <報告事項についての説明>
中央図書館長： <報告事項についての補足説明>
委員 長： 質疑等はあるか。
委員 員： （特になし）
委員 長： 報告事項 3 を了承した。

報告事項 4 静岡県・浙江省友好提携 30 周年記念事業 日中青年代表交流

- 委員 長： 報告事項 5 頁「報告事項 4 静岡県・浙江省友好提携 30 周年記念事業 日中青年代表交流」について、活洲社会教育課長より説明願う。
社会教育課長： <報告事項についての説明>

委員 長： 質疑等はあるか。
全委員 員： (特になし)
委員 長： 報告事項4を了承した。

報告事項5 水泳場・武道館の指定管理者の募集

委員 長： 報告事項6頁「報告事項5 水泳場・武道館の指定管理者の募集」について、松田スポーツ振興課長より説明願う。
スポーツ振興課長： <報告事項についての説明>
委員 長： 質疑等はあるか。
溝口委員 員： 選定委員会の構成で大学有識者のところでスポーツ社会学となっているが、スポーツ経営学ではないか。マネジメントの有識者が必要とされているのではないか。スポーツ社会学だとメディアとか社会思想とかになってくると思うので、これはスポーツ経営学の方が相応しいと思う。
スポーツ振興課長： 現在、具体的に候補にあがっている有識者の専門がスポーツ社会学であるため、そのように記入した。
溝口委員 員： 行政系ですよ。我々のような専門家から見ると、なぜ指定管理に社会学が入るのか不思議である。専門的にはスポーツ経営学とか行政学だと思う。そのように書いた方が見せ方としてはいいのではないか。
委員 長： スポーツ社会学は、学問的には地域社会のスポーツ振興ということですね。指定管理という分野とは少しずれるかもしれない。
溝口委員 員： 系列で書いた方がよい。
委員 長： 将来の検討課題としてお願い致します。
全委員 員： (特になし)
委員 長： その他、質疑等はあるか。
全委員 員： (特になし)
委員 長： 報告事項5を了承した。

報告事項6 国民体育大会第33回東海ブロック大会

委員 長： 報告事項8頁「報告事項6 国民体育大会第33回東海ブロック大会」について、松田スポーツ振興課長より説明願う。
スポーツ振興課長： <報告事項についての説明>
委員 長： 質疑等はあるか。
全委員 員： (特になし)
委員 長： 報告事項6を了承した。

【閉会】

委員 長： 以上で、本定例会の議事はすべて終了した。
これをもって、平成24年度第7回教育委員会定例会を閉会とする。